慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『小学校唱歌教授法』に見る明治日本の唱歌教育論の受容
Sub Title	The introduction of the musical education theory of the Meiji era in Elementary school music didactics
Author	高, 婷(Gao, Jing)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2009
Jtitle	哲學 No.122 (2009. 3) ,p.99- 119
JaLC DOI	
Abstract	Xingong Shen published the first songbook in contemporary China when he returned from his study in Japan, pioneering in the development of Chinese contemporary school education. In addition to the songbook, he also translated and published Elementary School Didactics by Ishihara Shigeo. However, it is important to note that Shen made some omissions and revisions to the original text in his translation, resulting in some significant inconsistencies between the original and the translated text in a great number of places. This article, through comparing the original and the translated text, illustrates what parts Shen decided to keep and what parts to leave out in his introducing the Musical Education Theory of the Meiji Era. It also explores the reasons behind these revisions and how they relate to the historical background of the time.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000122-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

『小学校唱歌教授法』に見る明治日本の唱歌教育論の受容

高　　婷*

The Introduction of the Musical Education Theory of the Meiji Era in *Elementary School Music Didactics*

Gao Jing

Xingong Shen published the first songbook in contemporary China when he returned from his study in Japan, pioneering in the development of Chinese contemporary school education. In addition to the songbook, he also translated and published *Elementary School Didactics* by Ishihara Shigeo. However, it is important to note that Shen made some omissions and revisions to the original text in his translation, resulting in some significant inconsistencies between the original and the translated text in a great number of places. This article, through comparing the original and the translated text, illustrates what parts Shen decided to keep and what parts to leave out in his introducing the Musical Education Theory of the Meiji Era. It also explores the reasons behind these revisions and how they relate to the historical background of the time.

* 北京語言大学外国語学院専任講師

はじめに

1903 年は近代中国における学校音楽教育の起点とされているが，そうした近代中国における学校音楽教育の揺籃期において沈心工は中心的人物とされている[1]．1904 年，沈心工が編纂した『学校唱歌初集[2]』は，学堂楽歌運動において最初に出版された唱歌集である．

沈は唱歌集の作成の傍ら，石原重雄の唱歌教授法書も翻訳した．1905 年，上海文明書局から沈心工の訳した『小学校唱歌教授法』が発刊されたが，原著は 1900（明治 33）年に出版された石原重雄の『新選小学校唱歌教授法[3]』である．『小学校唱歌教授法』の最後の頁に，「原著者，日本石原重雄」，「訳輯者，上海沈心工」と記されている．沈がここで普通に使う「訳者」ではなく，「訳輯者」を使ったのは，この『小学校唱歌教授法』は原著を逐語訳したのではなく，沈の考え方を加え意訳したことによるものと考えられる．これらの改訳された部分から，沈がどのように明治日本の音楽教育の蓄積を摂取したのか，そしてそれを際にしてどのような取捨選択を行ったのかを判明することができる．したがって本稿では，この訳書を取り上げて考察する．

両書の構成から見ると，原書は「唱歌科ノ地位」，「唱歌教授ノ目的」，「教材ノ選択」，「児童ノ音声」，「教授ノ方法」，「教案例」と「教授上ノ注意」の 7 章からなっているが，沈の訳書は原書の章立てを踏襲している．

次に，目的論，教材論と教授法の三つの視座から両書の異同を検証したい．

1.　目的論

目的論は，原書の「唱歌科ノ地位」と「唱歌教授ノ目的」の二章の内容に相当するものである．

石原は普通教育における教授の目的に対して，以下のような所見を提示している．

普通教育ニ於ケル教授ノ目的ハ所謂教育的教授ナリ教育的教授トハ彼ノ大工又ハ藝人ノ教授ニ於ケルガ如キモノニアラズシテ直接ニハ児童ノ思想ヲ形成シ間接ニハ其品性ヲ陶冶スル所ノ重大ナル責任ヲ有スルモノナリ而シテ此ノ間接ノ影響コソ實ニ教育的教授ノ最高目的…[4]

石原はヘルバルト主義の「教育的教授」という概念を持ち出し，「品性ヲ陶冶スル」ことを教育的教授の間接的な目的としながらも，それこそが最高目的であると明言した．それに対し，沈はこれらの言説を，「品性の陶冶は尚且つ教授の中の要点である[5]」と訳し，原文でいう「最高目的」を「要点」へと置き換えたのである．沈の訳文において，ヘルバルト主義の「教育的教授」の概念が省略されているが，沈にはこの概念に関する知識が欠けていると考えられる．

続いて，原文と訳文においていくつかの相違が見られる．原文では教授の目的を述べる際に，「多方ノ興味」を喚起することが提示されており，そして「多方ノ興味」を養成するための方法にも論及されている．一方，訳文では，「多方ノ興味」は「興味」と訳されている．

「多方ノ興味」とは，ヘルバルトによって定義された概念であり，教育内容の選定と結びついており，多方性に基づいて選択された教材は「唯一にして全体的な課題」である「道徳性」によって統合的に組織されるという論法である[6]．

沈の訳文で「多方ノ興味」という言葉が変えられたのは，沈にはこの言葉がヘルバルト主義と関連するものであるという知識が欠けていたからと考えられる．

唱歌の位置づけに関する文言において，訳文には原文を大きく改訳したところが見られる．石原は，ドルネルが諸教科を知識と技能の二種に分け，唱歌を技能的教科としたことに次のように異を唱えた．

> 故ニ唱歌科ノ如キモ氏ノ説ク所ニ拠レバ単ニ之レヲ技能的教科彼ノ圖書，手工，裁縫科ノ如キ技能的教科ヲ見ヨ即チ此等ノ教科ハ単ニ之レヲ技術トナシ技術ヲ授クルヲ以テ其本体トナシ技能ヲ習熟スル間ニ自ラ美育ヲ養ヒ徳性ヲ涵養スルニ至ルヲ以テ其目的トナセルガ如シト雖モ其實決シテ然ラズ…（中略）．即チ此等ノ教科ハ単ニ之ヲ技術トシテ学習スルモナホ他日必ズ其教科其者ノ為メニ効果ヲ得テ或ハ圖案調製シ或ハ衣服ヲ仕立ツルガ如ク直接ニ利益ヲ享クルコト多シト雖唱歌科ノ如キハ之レヲ技術トシテ学習スルトモ小学校ニ於テ学ビ得タルガ如キモノヲ以テハ未ダ実際ニ之レヲ応用スベカラズ単ニ其美ヲ感ジ其正邪ヲ識別スルニ足ル耳ヲ養成スルニ止マリ他日或ハ幾分ノ基礎ヲナスコトアルベシト雖之レヲ以テ圖書，裁縫ノ如キ直接ノ効果ヲ見ルコト難シ加之唱歌ハ児童ノ品性ヲ陶冶スルノ力最モ顕著ナルモノニシテ古来豪傑ノ士亦必ズ之レヲ利用シテ巧ニ風教ヲ維持シ国運発達ノ一要素トナシタルコト歴然證スベキモノアルニ於テオヤ故ニ唱歌科ハ全然之ヲ実質的教科中ノ主要ナルモノトナシ彼ノ修身歴史科ノ如キモノト同一ノ地位ニ存セシムベキモノナルコト自ラ明了ナルベシ（傍点は引用者によるもの）[7]

沈の訳文では傍点の付されている部分が省かれているのに対し，それ以外の部分は殆ど逐語訳された．省略された二箇所の文章の内容は，唱歌科における美育的意義を論ずるものである．したがって，これらの文章が削除されたのは，沈の判断によるものと考えられる．つまり，沈は唱歌の美育上の教育的意義に関する説明を不要なものとし，道徳上の意義に対する説明のみを残した．このことから，唱歌の道徳上の意義を最重視し，美育上の意義を等閑視する沈の姿勢が窺える．

実際に，明治 30 年代の日本の音楽教育界において，徳育のみならず，美育の側面から唱歌・音楽の教育的意義を論究するものも極めて多く見ら

れる．しかしながら，当時の中国における音楽教育の目的論に関する議論では，徳育を論拠にするものは圧倒的に多いが，音楽の美育的意義を論ずるものは極端と言えるほど少ない．こうした状況からして，当時の明治日本における唱歌の教育的意義に対する美育的論及は，当時の中国の教育界の音楽教育論に取り入れられなかったと理解できる[8]．しかも，当時中国の音楽教育界において明治日本の音楽教育の蓄積がかなり活用されていたことを考慮するならば，音楽教育の目的論において美育論が吸収されなかったのは，当時の音楽教育者の取捨選択によるものと推察される．上述した沈の訳文で，石原の唱歌の美育的意義に関する箇所が削除されたのは，当時の中国において美育論に立脚する学校唱歌教育論が展開されていなかったことを端的に表す一例といえる．

第二章「唱歌教授ノ目的」には，纏まった目的論があるので，ここで紹介しておきたい．石原は，唱歌の目的を「直接的目的」「間接的目的」に二分し，前者を「音楽ノ美ヲ辨知セシメテ高尚ナル快楽ヲ與」えるもの，後者を「児童ノ品性ヲ陶冶シ以テ教育ノ最高目的ヲ達スル[9]」ものと規定した．杉田政夫の指摘によると，石原の唱歌目的論では，美に着目し，教育の最高目的としての道徳的陶冶を唱歌教授の間接的目的としているところは，ヘルバルト教育学の影響と見られる[10]．

そして石原の音楽観は，以下のように表明されている．

> 人生レナガラニシテ美ニ感ゼザルモノナシ就中音楽ノ如キ人情自然ニ発動シテ生ジタル所ノ美ヲ聴キテ之レヲ愛ゼザルモノナキ（中略）．殊ニ彼ノ天真爛漫タル児童ノ常ニ口ヲ動カシ手ヲ働カシ寸時モ沈静ナルコト能ハザルガ如キハ固ト之レ天性ノ然ラシムル所ニシテ美妙ナル音楽ヲ聞クガ如キハ彼等ノ最モ悦ブ所ナルベシサレバ学校生活上ニ於テモナオ能ク其心意ヲ慮リ知識ヲ授クル所ノ教科ノ間ニハ必ズ音楽ノ如キ高尚ナル快楽ヲ與ヘテ其心神ヲ悦バシメ以テ其労苦ヲ慰安スル所

ナカルベカラズ故ニ彼ノ尋常小学校ノ児童等ニ対シテハ日毎ニ唱歌ノ時間ヲ設クルカ若クハ授業時間毎ニ各教科ノ応用トシテ一二曲宛ヲ唱ヘシムルガ如キハ彼等ノ心意二最モ適合スル所ニシテ其結果亦必ズ良好ナルヲ見ン[11]

これらの論には，石原の音楽観の要点として，第一に，人間は生まれながら美を感知する能力を持っているが，音楽は人間のこうした天性に適合するものであること，第二に，音楽は人間の自然な感情を表現するものであり美的であること，第三に，学校生活において，児童に知識を教授し，彼等の精神を愉快にし，授業の疲労を癒すために，音楽が必要であること，という三点が指摘できる．

石原はさらに児童に「美ノ思想ヲ発達」させ，「感覚ヲ精密」にするためには，「先ヅ外物ノ美ナルモノニツキテ漸ク其心緒ヲ開キ進ミテ其美ノ感受性ヲ鋭敏ナラシメ後ニ美情ノ心裡ヲ明カニスルコト[12]」が必要であるといい，美的思想の養成法を説いた．つまり，美的なものに常に触れさせることによって，美に対する鋭い感受性が培われ，美的心情が育成されるというのである．ここでは，美的なものとされている音楽の教育目的が美的感受性・心情を養うこととして捉えられている．

また，唱歌が歌詞により美的，道徳的，国家的など様々な「興味」を喚起することができ，修身科，歴史科，作文科，地理科などの他教科と極めて親密な関係を有することが可能だと述べている部分には，「多方興味」や「中心統合」が反映されていると見られる[13]．

興味深いことに，石原は徳育における修身科と唱歌科の役割を次のように比較している．

此科（修身科，筆者註）ハ直チニ道徳ヲ道徳トシテ説クヲ以テ或ハ児童ノ幼心ニ倦厭ヲ生ゼシムル憂ヒナシトセズ然ルニ唱歌ハ道徳ヲ以テ

之ヲ美的理想ト化シ以テ人生自然ノ心底ニ訴フ是レヲ以テ吾人ハ重キ道徳モ最モ楽シク美トシテ之レヲ行フコトヲ得ルナリ[14]

修身科においては直接道徳そのものを生徒に注入するのに対し，唱歌科においては道徳を美的理想の形にすることで徳育の目的がより効果的に実現されるという．つまり，両教科は教科内容が異なるものの，生徒に道徳を注入することを目的にしていることが共通しており，唱歌は人間の感情に訴えることにより，より深層的且つ自然に徳育の目的が達せられることが想定されているのである．

この第二章において，美育は石原の唱歌目的論の主柱であり，欠くことのできない内容となっている．したがって沈の訳文では，このような石原の目的論を忠実に翻訳しており，美育に関する部分でも改訳したところは見あたらない．

しかしながら，このような美育に着眼する石原の唱歌目的論は沈の唱歌教育論には反映されていなかった．1912年，沈は以前の唱歌集を改訂して『重編学校唱歌集[15]』を出版したが，その中の「編輯大意」では，徳育に資する教科として唱歌を捉えるという考え方が表明されているものの，美育として唱歌を意義付ける論は展開されていない．このことから，石原は『新選小学校唱歌教授法』において，多くの紙面を割いて美的思想の養成を目的とする唱歌教育論を論じていたにもかかわらず，結果的に沈の唱歌目的論に影響を与えるところに至らなかったと考えられる．

2.　教材論

石原は教材全般の条件について

先ヅ其教育力ヲ有スルモノニ限リテ之レヲ選ビ又児童発達ニ恰當セル所ノ分量ヲ以テシ既知ノ観念ハ同化シテ興味ヲ惹キ起スニ足ルベキモ

ノナラザルベカラズ[16]

と述べているが，杉田政夫はこれがラインの教材論と合致する意見と看做している[17]．ラインの主張によると，唱歌教材の歌詞は，形式的にも内容的にも生徒の知っているものでなくてはならないという．これはラインの興味論から必然的に導かれる見解であるとされている[18]．

一方，沈の訳文では，「既知ノ観念ハ同化シテ興味ヲ惹キ起ス云々」が省略されている．第一章の訳文において，「多方興味」という言葉が改訳されたことと併せて考えると，沈にはヘルバルト主義の「多方興味」の理論に関する知識が欠乏していたといえよう．

石原の教材観は歌詞と旋律の二側面から説明されているが，旋律の選択基準は長，短音階の特徴に基づいて，

其長音階及ビ短音階ノ二種ハ従来専ラ泰西ニ於テ行ハレシ所ノ音階ニシテ極メテ精巧ナルモノナリ然レモ此二者其性質ヲ異ニスルコト殆ンド雲泥ノ如ク其長音階ヨリナル所ノ歌曲ハ勇壮活発ニシテ自ラ爽快ナル精神ヲ喚起スルニ足レリト雖短音階ヨリナル所ノ歌曲ハ多ク悲哀憂鬱ナリ故ニ短音階ハ憂愁ノ情ヲ催サシムルガ如キ歌曲ヲ製作スルニ適セリト雖此ノ種類ノ歌曲ヲ以テ小学児童ニ授クルガ如キハ決シテ好マザル所ナリ[19]

と説明してから，「故ニ普通教育ニ採用スル所ノ唱歌ハ主ニ長音階的モノヲ採」るべきである[20]と結論付けている．これは伊沢の主張を踏襲しているものと考えられる．

1884（明治 17）年，伊澤修二が文部省に提出した『音楽取調成績申報書』の「長短二音階ノ関係」という一節では，「単ニ長短音階ノ得失利害ヲ照査スルニ，長音階ノ旋法ニ属スル楽曲ハ勇壮活発ニシテ，其ノ快情実

ニ極リナシ．之ニ反シテ，短音階ノ旋法ニ属スルモノハ柔軟憂鬱ニシテ，哀情ノ甚ダシキモノトス[21]」とあり，学校の唱歌教育上，短音階より長音階を採用すべきことが示されている．伊澤が中心になって編纂された『小学唱歌集』と，約十年後に刊行された『小学唱歌』は，ともに長調が圧倒的に多いものであり[22]，伊澤の音楽観が反映されていると察せられる．

そして，ここで注意を向けなくてはならないのは，沈心工が編纂した唱歌集のなかでも，長調が主流を占めていることである．『学校唱歌初集』の全23曲のなかでは，短調の歌は1曲のみである．1906年に出版された『学校唱歌二集』の14曲のなかでは，長調は12曲で，相変わらず圧倒的に高い割合を占めている[23]．この二冊の唱歌集はそれぞれ石原の訳書が出される前後に出版されたことを考慮するならば，沈が唱歌を作成する際，石原の主張を踏襲していたと考えられる．

次いで，唱歌に採用すべき歌詞内容については，「敬虔的興味」「同情的興味」「国家的興味」「美情的興味」を喚起するもの[24]が挙げられており，「多方興味」を意識したうえでの記述と見られる．

注目すべきは，原文では，「敬虔的興味」を喚起するのに，「聖主ノ徳澤ヲ欽慕」させるもの，「祭日ノ儀式ニ唱謡」するもの，「敬神ノ心ヲ喚起」するもの，「聖人君子ノ伝記」を詠うもの[25]，を唱歌の材料にすべきであると述べられているが，訳文では，こうした内容の後に沈による以下の解説が加えられていることである．

> 凡そ歌曲を作るならば，細かく留意を払わなくてはならない．例えば日本は万世一系と自負しているが，これは我国の政府と異なるところである．而してまた立憲政権が立てられ，日本の全国民はこれを詠わなければならないという旨を民衆に下賜した．それは宜しいが，我国の児童にこれを適用することはできない．また，敬神と詠聖に関しても，適切に行われるならば，愛国心が喚起され自立心も培われるが，

但し迷信と古人に対する崇拝に教育者は注意を払わなくてはならない[26].

つまり，原文の国家主義的色彩が色濃く反映されている箇所に関して，沈は当時中日両国の政治体制の違いを指摘したうえで，迷信と盲信に警鐘を鳴らしている．このことから，沈は唱歌を通して愛国心と自立精神をはじめとする近代的精神が養成されることを企図しているのであり，迷信など近代精神と相反するものに危惧の念を抱いていることが分かる．また，「立憲政権云々」は日本の学校音楽教育が国家事業の一環として上から系統立てられてきたことに対する違和感を表す言葉として受け止められよう．

なお，原文では，四種の教材についてそれぞれ説明されているのみならず，各種の教材の例として日本の唱歌が挙げられた．これらの例は，訳文では，沈の作成した唱歌へと置き換えられた．具体的には，「敬虔的興味」の唱歌に「尊孔歌」，「同情的興味」の唱歌に「雁字」，「花園」と「楽群」，「国家的興味」の唱歌に「揚子江」と「何日醒」，「美情的興味」の唱歌に「春遊」と「秋之夜」が例として挙げられている[27]．ここでは，沈が自分の編集した『学校唱歌初集』に収載されている「春遊」と「秋之夜」の 2 曲を美情を喚起するものと位置づけていることは注目に値する．なお，孔子を謳う「尊孔歌」を「敬虔的興味」を喚起するためのものとされたのは，孔子を尊敬する念が如何に根深いものであったかを端的に示している．

そして，原文の「同情的興味」に関する解説には，「同情的興味ヲ喚起スルモノニハ又遊戯若クハ体操科ニ関連シ共同ノ活動[28]」が効果的であると説明されているが，訳文ではこの部分が省かれた．しかしながら，『学校唱歌初集』では，沈が「同情的興味」の唱歌として挙げた「雁字」と「花園」には遊戯法の説明が収められている．『学校唱歌初集』が出版されたのは，『新選小学校唱歌教授法』の訳書が出された 1906 年より 2 年前の 1904 年である．沈が日本留学中に『新選小学校唱歌教授法』を入手し

たとするならば,『学校唱歌初集』が出版された当時に翻訳がまだ終わっていないものの，既に目を通したことが推測される．しかも，帰国後小学校現場で唱歌教育に携わっていた沈にとって，石原の『新選小学校唱歌教授法』が指南書として使われていたのは，むしろ当然の成り行きであろう．実際,『学校唱歌初集』の歌曲において，上記の 4 種のものが収載されているのも,『新選小学校唱歌教授法』から影響を受けていたと見受けられる.

第三章の最後に，この 4 種の教材を配列する割合に関して，石原は次のように述べている.

> 以上四種ノ教材ハ適宜ニ之レヲ配当シ決シテ或ル一二種ノモノニ偏スルコトアルベカラズ而シテ男女ノ性質ニ適合スルモノヲ選ビテ之レヲ区別シ且ツ各教科ニ於テ授ケラレタル程度ニ従ヒ時期ト場合トヲ鑑ミテ之レヲ選択セザルベカラザルナリ[29]

ここで，各種の教材の歌曲をバランスよく分布すべきであるという主旨が表明されたが，実際のところ，明治日本の多くの唱歌集においても沈心工の唱歌集においても,「国家的興味」を喚起するためのものは，圧倒的に高い割合を占めていたのである[30].

3.　教授法

第五章では教授法が述べられている．石原は，教師は以下の三つの段階を踏まえ，教授を進めていくべきであるとしている.

> 第一ニ如何ナル順序ニヨリテ其教材ヲ提出スベキカ
> 第二ニ教授ヲ為スニ當リテハ如何ナル体裁ニヨリテ之レヲ教授スベキカ

第三ニ教授ノ際ニハ如何ナル状態ヲ以テ之ニ當ルベキカ[31]

そしてさらに，この三つの事項のなかでは教材が提示される順序がとりわけ重要であり，児童の「自然ノ心理的順序ニ従」い教材を提示していくべきである[32]と指摘した．つまり，教材の内容を，児童の理解力に応じて易から難へと配列することが主張されている．これは，「普通教育ニ於テハ教授の主格即チ生徒ニ注目スル」ためであり，「教授ノ賓客即チ教材ニ注目スル[33]」という，児童と教材の関係を主従関係として捉える児童中心的な発想に基づいた普通教育における教授の方針を打ち出している．

学校教育における唱歌教育を美の思想の教育と位置付けた石原は，「美ノ思想」を涵養する方法を，美情の喚発と美の知覚の練磨という二つの側面から論じている．美情を喚発するためには，「美ナル物ニ接シテ其美ヲ喜ブノ情ト美情ニ富タル人ト相伴ヒテ其情ニ感染[34]」させることが良法であるという．

そして，美的思想における教育目的の提示は，知育とは異なり，予備，教授と練習という三つの教授の段階を経て行われるというが，これはヘルバルトの「形式的段階」に基づく教授法とされている．

1894（明治 27）年に松岡鋼一郎の『小学校唱歌教授法[35]』が上梓され，そのなかの教授法に関する記述には，「予備」「教授」「練習」の文言が見られ，青柳善吾の指摘によると，これはヘルバルト主義の「形式的段階」の影響を受けたものであり，ヘルバルト主義がはじめて唱歌教授法に適用されたものとされている．ここで特に注目すべきは，唱歌教授における「形式的段階」が，予備，教授と練習の三段階に短縮されている点である[36]．これは，その後の日本において定着する三段階唱歌教授法のモデルとなった可能性が考えられるとされている[37]．

一方，石原の原文で「予備」段階においては，「歌詞ノ大意ニ付キ質問又ハ説明ヲ試ミ其歌曲ノ精神ヲ生徒ニ[38]」知らせておくことが示されてお

り，これを石原は「材料的予備[39]」としている．その次に紀元節に関わる唱歌が例に挙げられているが，ここからも，当時の日本の唱歌教授において，国家主義的，忠君愛国的精神の養成が目的とされていたことが表されている．訳文では原文の例が省略されたものの，沈自身の作品である「地球」という唱歌を教えるために行われる歌詞の予備段階として，太陽，地球と月球の知識に関する問答が例として挙げられている．「以前学んだ本のなかでは，地球はどのような形をしているか[40]」という教師の質問から始まり，生徒の既習の知識を持ち出している．ラインは，「予備」段階では，これから教授しようとする新たな事物と類似関係にある旧観念を児童に想起させ，新事物の類化に役立たせることを主張しているが[41]，沈の訳文で挙げられた例からして，意識したうえでのことではないものの，結果的にラインの考え方を踏襲するものであったと理解できる．

次に「教授」段階において，楽譜と歌詞の提示が規定されている．石原はここでは，楽譜と歌詞の関係について，

> 楽譜ノ提示ハ固ト唱歌教授ニ於ケル真正ノ目的ニアラズシテ歌詞ヲ以テ唱歌シ得ルニ至ラシムル所ノ予備ニ外ナラザルモノナリ[42]

と述べている．つまり，唱歌を唱歌たらしめるのは楽譜ではなく歌詞であるとしている．これは唱歌教授の重点が歌詞に置かれていることを示している．このような歌詞に対する位置づけから，歌詞の意味内容を伝達することを唱歌教授の中心としたのは当然の成り行きであるといえよう．

唱歌教授における楽譜と歌詞の関係についての訳文では，沈は「学校の中で目指されているのは，全ての生徒が皆音楽を知るようになることではなく，歌を歌うことのできない人を一人もいないようにすることである[43]」と付け加えている．以上の文言は沈の学校唱歌教育の目的論であるが，ここでは，学校音楽教育の目的は専門家を育成することと区別され，

読譜などのことが目的ではなく，実際に歌えることが唱歌教授の目指すことであるとされている．

教授段階の次に教式について言及されているが，石原は，児童の発達段階に応じ，口授教式，略譜教式，本譜教式の三教式を挙げ，幼稚園及び尋常科の一二年生口授教式，それ以上は略譜教式，高等小学校は本譜教式によるべきであるとしている[44]．口授教式は「専ラ聴官ノ作用ニヨリ口ヨリ耳ニ傳ヘテ教授スル[45]」方法で，その主な目的は「生徒ノ耳覚ヲ聰ニシ其音聲ヲ艶ニシ以テ音楽ノ趣味ヲ會得[46]」させることであり，したがって，「決シテ許多ノ歌曲ヲ教フルヲ要セズ却テ其曲数ノ少[47]」いほうが良いとされている．

一方，沈が『重編学校唱歌集』の序言において，「児童に唱歌を教授するのは，たくさんの新曲を教えることが目的ではなく，教えた曲を熟知させ，いつでもどこでも独力で応用できることが目的である[48]」と述べていたが，こうした少量でありながら確実にという考え方は，石原の所見を踏襲したものといえよう．

教授用の楽器について，石原はまず楽器の効能を「音調ノ基本ヲ定メテ教師及ビ生徒ノ音声ヲ補助シ且ツ其唱歌ニ一段ノ美ヲ添[49]」えることと論じている．しかし，沈の訳文では楽器の唱歌に美を加える効能は省略されており，沈は唱歌教授の美的な側面に対する関心が希薄なことを改めて表している．

一方，石原は小学校用の楽器として洋琴，風琴とバイオリンの三種類を挙げ，それぞれ特徴を次のように述べている．

> 洋琴ハ音調雅正ニシテ殊ニ快活ナル曲ニ適シ遊戯唱歌，体操唱歌及ビ軍歌等ノ如キモノニハ最モ適切ナルモノナリト雖モ其価格頗ル不廉ナルヲ以テ方今ノ状態ニ於テハ到底之レヲ望ムコト能ハズ故ニ通常風琴ヲ使用スルモノ最モ多シヴァイオリンハ極メテ簡便ナル楽器ニシテ而

カモ音色雅正純良ナルモノナレバ緩急意ノ如ク奏スルコトヲ得従テ彼ノ国ニ於テハ熾ニ之レヲ用フル由ナレモ其操法頗ル困難ナルヲ以テ良教師ヲ得ルコト極メテ難シ[50]

つまり，三種類の楽器のなかでは，ピアノは値段が高く，バイオリンは演奏法が難しいということが原因で，オルガンは当時の日本小学校唱歌教授で最も多く使われていたという．一方，清末中国の唱歌教育の草創期においても同じ状況を呈していた．沈は1904年に『学校唱歌初集』を上梓したが，そのなかで，多くの紙面を割いて「風琴使用法」を説明していたのは，当時の中国の唱歌教育に風琴が最も適しているという考えによるのみならず，当時の日本唱歌教育においても風琴が多用されていたことも念頭にあってのことと推察される．

4.　教案例

石原は教案例として，「かり」と「琵琶湖」（伊澤修二編『小学唱歌』所載，筆者註）の実際的取り扱いを述べているのに対し，訳文では，沈自身の所作の唱歌の「雁字」と「運動会」を例に挙げている．但し，「雁字」は「かり」を基にし，歌詞を中国語に翻訳したものである．両者を比較してみると，原文では友愛の情を唱える歌詞を説明するときに，教育勅語にある「兄弟ニ友ニ」が引用されているところを削除したほかには，大きな違いは見受けられない．したがって，下記に沈が教案例に挙げた「運動会」を中心に考察したい．

題目　運動会（同情的興味を喚起するもの）
目的の提示　今日は運動会（板書）という歌を学びます．
第一段階予備　運動という二文字はどういう意味ですか――会はどういう意味ですか――運動会と身体とはどのような関係があるのですか

――足を運動して楽しいですか――運動会を開くことは，集団精神の育成に影響がありますか――我等はどうして弱いですか――運動するのにいつが一番よいのですか――運動することのどういう点が一番良いのですか――運動の効果はどういうことですか――

私はこれから運動会の曲譜を書きますが，諸生はこのなかで新しい記号があるかどうかに注意してください（この際，教師は略譜を黒板に書く）

（略譜を省略，筆者註）

この譜のはじめのところに，どのような新しい記号がありますか――そう．凡そ数字の下に一本の短い線があるものは，これを八分音符といい，二本の短い線があるものは十六分音符といいます（八分音符と十六分音符を黒板に書く）．そして，八分音符の長さは，四分音符の半分に相当し，十六分音符の長さは八分音符の半分に相当します．――此の譜のはじめのところに，外にどのような記号がありますか――そう，数字の後ろに・がついているものは，付点というのです．付点がついているところは，必ず付けられた音符の半分の長さを伸ばします．例えば此の節の一番目の数字は八分音符で，しかも付点がついています．此の場合は，八分音符の半分の長さ，つまり十六分音符の長さを伸ばすべきであり，したがって，この一番目の数字の長さは十六分音符の三倍となります．此の譜のはじめのところに，外に何か記号はありますか――そう，数字の下に・がついている場合は，それが低音であることを表しています．一曲を歌うときに，先ずは主調を判明し，これより低いものは低音で，これより高いのは高音であるとします．（傍注，高音部は数字の上に・をつける）第六小節のなかでは，又何か初めてみる記号はありますか――そう，二つの音符の上に，曲線がついているのです．（曲線の様式を板書）これは結合線（タイ，筆者註）といい，此の二つの音符は一音に結合することがで

きるということを表しています．――ほかにまだ何か始めてみる記号はありますか――そう，第十五小節のなかに，四つの数字があるが全部十六分音符でありしかも同じところに表記されています．この四つの音符を連結したのは，特別な意味はない．それでは，今私が此の譜を歌ってみますから，譜をみながら聞いてください．（この時教師は楽器の音と共に全曲を歌う）――今度は私はこの曲を何段かに分けて，一段ずつゆっくりと歌います．特に，第六節，第十節，第十四節及び第十五節のところを注意して聞いてください．

第二段階教授　今度は皆さんも一緒に歌いましょう．…（この時生徒全員に起立して合唱させ，前記の口授のところで示したように逐次練習させる．）

皆さんは此の曲を大体歌えるようになったので，これから歌詞を歌いましょう．（この時教師は以前に板書した楽譜の下に歌詞を書き込む）私はこれから第一段の歌詞を読みますから，聞いてください…（教師はもう一回全曲の歌詞を一通り読みながら，順次に解説していく）．

第三段階練習　此の段階においては，生徒が前の段階より少し成長したため，方法は多少異なるが，その大体においてはほぼ同じである[51]．

ここで示されている「運動会」の教案例では，沈自身の教育実践が盛り込まれていると考えられる．その特徴は以下の四点に要約できる．第一に，唱歌教授の中核は教師の発問に対して生徒が答えるという問答法によって進められていることである．これは明治日本の唱歌教育にもよく使用されていた方法であり，ペスタロッチ主義に基づいているとされている[52]．なお，この問答法の過程においては細部まで規定されており，教師が予め準備した授業計画に基づいて一方的に生徒に教え込むという傾向が

見受けられる．

第二に，教授段階は「予備」「教授」と「練習」の三段階に分けられているのみならず，各段階の細説においても石原の所説を踏襲しているものの，石原の教案例と異なる点も見受けられることである．例えば，歌詞と音楽という二つの側面から教授の目的が提示される点については，石原の主張と一致しているが，音楽的予備段階において，一回で八分音符と十六分音符，付点，タイ，低音と高音など，多数の新しい音楽要素が登場しており，石原の教案とは異なっている．つまり，沈の教案例においては，新しい音楽要素が少しずつ漸次に提示されていくのではなく，一つの歌曲において一気に出現するのである．

第三に，唱歌の教授方法において，教授事項を板書することが重視されているが，これはペスタロッチの直観を重んじる観点を踏襲していた日本の学校音楽教育[53]から影響を受けたものと看取される．

第四に，教案例では，「予備」「教授」と「練習」の三段階において，「予備」に対する解説が最も詳しく書かれており，そして，原書と比較しても，訳文の方はこうした「予備」段階を詳説する傾向が強く見受けられる．

ま　と　め

青柳善吾はかつて，石原の『新撰唱歌教授法』は，道徳を優位に置き，唱歌教授の目的が徳性の養成にあると主張したうえで，多方的興味に言及し，教授の形式段階を踏襲しているところなどは，多くの点でヘルバルト学派の音楽教授理論に根ざしたものであると指摘している．そして青柳は，本書が唱歌教授の理論と実際とを簡明にしかも組織的に述べているから，明治末期頃まで唱歌教授法の基本書として広く読まれ，その後に著作された幾多の唱歌教授法書は，大体本書の引き伸ばしに過ぎないと評価している[54]．

青柳の評価を基にすると，沈は当時の日本の代表的な小学校唱歌教授法書を翻訳したと考えられる．これまでの訳書と原書との比較から，以下の点を指摘することができる．

石原の原書では，唱歌教育の目的を徳育と美育という二つの方面から説明しており，教授法において美的養成を意識していると看取される．沈の訳文では，石原の唱歌の徳育的効能の部分に関しては忠実に訳されているが，これは，沈が石原の唱歌の徳育的教育機能を重視する考えに同調していることに起因していると考えられる．その一方，唱歌の美的教育機能に関する部分において省かれた箇所が見受けられ，沈は唱歌の美育上の教育的意義を重要視していなかったといえる．

なお，沈があげた教案例のところでは，教授段階は「予備」「教授」と「練習」の三段階に分けられており，石原の所説を踏襲しているが，結果的には明治期に日本において定着した三段階唱歌教授法[55]の影響を受けるものとなっている．

また，沈の唱歌集では，目的論における徳性の涵養への強調，教材における修身などの他教科との連携及び学校生活との関連性の重視，選曲にみる長音階への傾斜，低学年の唱歌教授における遊戯法の使用などのことにおいては，当時日本の学校音楽教育界に多大な影響を与えたヘルバルト主義の唱歌教育論を踏襲しているが，実際その殆どが石原の『小学校唱歌教授法』のなかで主張された見解でもある．したがって，沈は直接的ではなく，ヘルバルト主義の影響を受けていた石原の唱歌教授論を介して，間接的にヘルバルト主義の音楽教育論を受容したと考えられる．何故なら，沈自身はヘルバルト学派の教育理論の重要な概念である「多方興味」に関する知識は有していなかったことから，沈は意識的にヘルバルト学派の音楽教授の理論を援用したのではなく，あくまで石原の理論を踏襲したと理解される．

註

1　汪朴「清末民初楽歌課之興起確立経過」,『中国音楽学』1997 年第 1 期，65 頁.
2　沈心工『学校唱歌初集』務本女塾発行，1904 年.
3　石原重雄『新撰小学校唱歌教授法』共益商社楽器店，1900 年.
4　同上，1–2 頁.
5　沈心工『小学校唱歌教授法』文明書局，1905 年，3 頁.
6　杉田政夫『学校音楽教育とヘルバルト主義』風間書房，2005 年，85 頁.
7　前掲石原重雄『新撰小学校唱歌教授法』，6–8 頁.
8　管見の限り，この時期に，王国維と剣虹のほかに，美育を論拠とする音楽教育論は見当たらない.
9　前掲石原重雄『新撰小学校唱歌教授法』，9 頁.
10　前掲杉田政夫『学校音楽教育とヘルバルト主義』，148 頁.
11　前掲石原重雄『新撰小学校唱歌教授法』，9–10 頁.
12　同上，10 頁.
13　同上，16 頁.（なお，要約は前掲杉田政夫『学校音楽教育とヘルバルト主義』，148 頁を参照した）
14　同上，16 頁.
15　沈心工『重編学校唱歌集　初集—六集』文明書局，1912 年.
16　同上，20 頁.
17　前掲杉田政夫『学校音楽教育とヘルバルト主義』，150 頁.
18　同上，92 頁.
19　前掲石原重雄『新撰小学校唱歌教授法』，24–25 頁.
20　同上，26 頁.
21　伊澤修二『音楽取調成績申報書』1884 年（1991 年大空社より復刻），143–146 頁.
22　前掲杉田政夫『学校音楽教育とヘルバルト主義』第一章参照.
23　沈心工の唱歌集の詳細分析については，筆者の博士論文「近代中国における学校音楽教育論の成立史研究」第四章の第 3, 4 節を参照.
24　前掲石原重雄『新撰小学校唱歌教授法』，29–30 頁.
25　同上，29 頁.
26　前掲沈心工『小学校唱歌教授法』，21 頁.
27　同上，23–25 頁.

28　前掲石原重雄『新撰小学校唱歌教授法』，33頁.
29　同上，34–35頁.
30　杉田政夫は，その著書『学校音楽教育とヘルバルト主義』のなかで明治日本の唱歌集の内容分布に関して詳しく考証している．沈心工の唱歌集については，筆者の博士論文「近代中国における学校音楽教育論の成立史研究」第四章の第3, 4節を参照.
31　同上，48頁.
32　同上.
33　同上.
34　同上，52頁.
35　松岡鋼一郎『小学校唱歌科教授法』1894年（同書には出版元が記されておらず，出版地，三重県桑名町とあるだけである，筆者註）.
36　日本教育音楽協会・青柳善吾『本邦音楽教育史』音楽教育書出版協会，1934年（1982年に第一書房より復刻），199頁.
37　前掲杉田政夫『学校音楽教育とヘルバルト主義』，144頁.
38　前掲石原重雄『新撰小学校唱歌教授法』，57頁.
39　同上.
40　前掲沈心工『小学校唱歌教授法』，46頁.
41　ヴェー・ライン他著，山口小太郎，佐々木吉三郎共訳『小学校教授の原理』同文館，1901年，272頁.
42　同上，60頁.
43　前掲沈心工『小学校唱歌教授法』，49頁.
44　同上，65–69頁.
45　同上，65頁.
46　同上，65–66頁.
47　同上，66頁.
48　前掲沈心工『重編学校唱歌集　初集』3頁.
49　前掲石原重雄『新撰小学校唱歌教授法』，86頁.
50　同上，86–87頁.
51　前掲沈心工『小学校唱歌教授法』，62–66頁.
52　前掲杉田政夫『学校音楽教育とヘルバルト主義』，147頁.
53　河口道朗『近代音楽教育論成立史研究』音楽之友社，1996年，102頁.
54　前掲青柳善吾『本邦音楽教育史』，241–242頁.
55　同上，139頁.